

輝きを求めて 日本高純度化学 12

競合社、株式市場も注目 学ぶべき点多い企業スタイル

ドラマチックな上場ストーリー、持たざる経営、特異なビジネスモデルと、日本高純度化学は独自のスタイルで業容を拡大してきた。

この「日本高純度スタイル」はマスコミの注目を集め、同社はいまや競合企業だけでなく、株式市場も注目する存在だ。

同社に原価計算システムもなかった時代に転身、在庫削減を行い、生産システムを構築した業務部長の峰壽蔵は、「(前職の)大メーカーの能率的でないところは改善しようと思った。当社の特徴は部門間の歯車がうまくかみ合っていること。新しい課題も多いがやりがいも多い」と語る。

峰と同様、同社の役員、管理職クラスは他社からの転職者が多い。彼らは大企業と中小企業双方を経験し、それぞれのよさ、悪さを肌で感じている。

それゆえ「中小企業の欠点は改めよう。しかし、社内コミュニケーションのよさ、意思決定の速さ、機動力の高さなど、中小企業ならではのよさは残したい」というのが共通認識である。

ところで、企業は何をもって「よい」といえるのであろうか。立場により「エクセレントカンパニー」の定義は違うが、事業を通して社会に貢献すること、すなわち社会に必要なとされる製品、技術、サービスを提供することが第一条件だ。その上で、雇用、納税、社会的責任が出てくる。

社会から不要とされれば、企業の存在価値はない。事業の継承と発展を通して安定雇用、納税を行い、社会インフラに還元できる。日本高純度化学の製品、サービスが必要とされていることは売り上げの伸びと高シェアで証明されている。

では、発展はどうか。

「業界ナンバーワンでなければ、成長はありえない。健全な発展のために常々、『現在の顧客・仕事の確実な維持』『近い将来手がけるべき仕事の準備』『2、3年後、主力となりえるテーマの開発』のバランスよい推進を考えている」と渡辺社長はいう。

継承についても、「将来の開発の可能性については、市場の要求、会社のパフォーマンスなどを考慮して、有望な分野をピックアップし、蓄積した技術と技術陣の開発能力を集中的に投入する」とキッパリ。

「次の目標は設定済み。開発も順風満帆であるが、会社の進路を誤るわけにはいかない。永続的成長のために、次世代の経営陣に『次のテーマ・次の仕事を探し出す』センスを引き継ぐことが大切」と続ける。

日本企業はいま、新しいモデルを模索している。企業倫理、社会的責任は揺らぎ、企業のあり方も変わりつつある。こうしたなかで、中小企業と大企業のよさを上手にブレンドした持たざる経営、独自のビジネスモデル、フラットな組織など学ぶべき点は多い。

日本初のMBO(経営陣による企業買収)を実現した「高付加価値製品に特化したビジネスモデル」のトランスファーは容易ではない。そして企業の価値、存在を裏付ける「あり方」を構築することはさらに難しい。だからこそ、価値がある。輝いているのである。

(フリーライター 片岡緑)
= おわり